

## 性格特性からみた臨床実習中の患者—看護学生関係の変化 — 対象—看護者関係評価尺度 (CNRS) による検討 —

川崎医療短期大学 第一看護科\*

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科\*\*

新見 明子\* 深井喜代子\*\* 田中 美穂\*

(平成 7 年 8 月 21 日受理)

### A Change of Relationship between Student Nurses and Inpatients from Viewpoint of the Students' Personality during Clinical Practice: Examination by Client-Nurse Relationship Scale (CNRS)

Akiko NIIMI\*, Kiyoko FUKAI\*\* and Miho TANAKA\*

\*Department of Nursing  
Kawasaki College of Allied Health Professions  
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan

\*\*Department of Nursing  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan  
(Received on Aug. 21, 1995)

**Key words** : 患者—看護学生関係, 対象—看護者関係評価尺度, 性格特性

#### 概 要

対象—看護者関係評価尺度 (CNRS) を使用して, 臨床実習中の看護学生と受け持ち患者との関係の変化を測定し, 個人の心理的あるいは性格的な特性がその評価にどの程度関与するかを検討した。その結果, 臨床実習中に患者—看護学生関係が深まることが CNRS によって明らかになった。CNRS の 3 つの因子 (F1, 人間性; F2, 威圧感; F3, 専門性) のうち, F1 と F3 がその関係成立に影響することがわかった。既成の心理テストである, YG 性格検査, TAOK—エゴグラム, TAOK—OK グラム, MAS で学生の性格特性を調べると, エゴグラムの 4 タイプと CNRS の F1 および F3 因子得点との間にのみ関連性が認められた。エゴグラムの各タイプ間で因子得点を比較すると, F1 得点は CP 優位型で高く, AC 優位型で低かった。また, F3 得点も AC 優位型で低かった。これらのことから, 対人関係評価は, エゴグラムに何らかの影響を受けることが示された。

#### 1. はじめに

効果的な看護活動を展開するためには, 的確な判断力とケア能力の他に, 患者—看護者間の良い人間関係が必要である。著者らは, 対象—看護者関係を対象側から評価する尺度として, 対象—看護者関係評価尺度 (Client-Nurse Relationship Scale, 以下 CNRS) を開発した

(深井と杉田, 1994)<sup>1)</sup>。この CNRS は対人関係の尺度であるため, 個人の心理的あるいは性格的な何らかの特性が評価に関与する可能性があると考えられる。そこで, この点を明らかにするために, 既成の代表的ないくつかの心理テストの結果と CNRS による評価との関係を検討し, 興味深い知見を得たので報告する。

## 2. 研究方法

### 1. 対象

臨床実習期間中の本学看護科女子学生23名(平均年齢 $20.3 \pm 1.0$ 歳)を研究対象とした。なお、学生の受け持ち患者は、男性14名、女性9名、(平均年齢 $61.7 \pm 14.3$ 歳)であった。

### 2. CNRSによる患者—看護学生関係の評価

研究期間：1994年10月11日～12月8日

CNRSは、対象—看護者の関係に係わる24の項目からなる信頼性と妥当性が証明された質問紙で、各項に4段階のリッカート・スケールをもうけ、3～0点で得点化し、計72点満点で採点評価する。因子分析により「人間性への信頼感」(F1, 10項目群)、「威圧感」(F2, 8項目群)、「専門性への信頼感」(F3, 6項目群)の3つの因子を含むことが分かった<sup>1)</sup>。

CNRSによる評価は、学生が患者を受け持った2日目(前期)と実習最終日(13日目)または患者の退院日(後期)の計2回行った。なお、CNRSは本来患者側から看護者を評価する質問紙であるが、この研究では、学生が患者にどう思われているかを推測して、各質問項目に対して評価させた。

### 3. 学生の性格特性の調査

学生の性格特性を多角的に知るために、既成の心理テストのうち、YG性格検査、TAOKエゴグラム、TAOK—OKグラム、MAS(顕在性不安検査)を用いた。YG性格検査においては、そのタイプを既成の分類法により、A、B、C、D、Eの5タイプに分類した<sup>2)</sup>。TAOKでは、エゴグラムを判定し、CP、NP、A、FC、ACの5つの優位型に分類した<sup>3)</sup>。また、OKグラムでは、自己肯定・他者肯定型(自+ 他+)、自己肯定・他者否定型(自+ 他-)、自己否定・他者肯定型(自- 他+)、自己否定・他者否定型(自- 他-)の4タイプに分類した<sup>3)</sup>。MASでは、各人の総得点を算出し、基準化された女子大学生の5段階評価法に基づいて、27点以上I、23-26点II、14-22点III、10-13点IV、9点以下Vと5段階5タイプで分類した<sup>4)</sup>。

これらの心理テストは、研究にはいる前に実施した。

## 3. 結果と考察

### 1. CNRSによる評価

まず、学生のCNRS総得点は、前期 $47.6 \pm 8.0$ 、後期 $53.4 \pm 7.8$ と有意に増加し( $P < 0.05$ )、実習期間中に両者の関係は深まっていた。各因子得点では、F2が高い反面、F3は低く、学生は威圧感を感じさせない存在であるが、専門性への自信の無さがうかがえた。

次に、各学生の前期から後期への各因子ごとのCNRS得点の推移を図1に示した。F2では、得点の増減にばらつきがあったが、F1、F3においてはほとんどの学生で前期より後期の得点が増加しており(F1とF3,  $P < 0.05$ )、学生と患者との関係成立には、人間性や専門性への信頼感が影響していると考えられた。

### 2. 心理テストによる性格特性とCNRS評価の関係

まず、CNRSの総得点(後期)を各心理テストによる性格特性と比較した(図2)。なお、以下の分析には、性格特性の不変性・安定性を考慮して、後期(2回目)の評価得点を採用した。t検定による分析の結果、CNRS得点は、YG性格検査の各タイプ(図2, a)、OKグラムの各タイプ(図2, c)、MASの各タイプ(図2, d)では、いずれもタイプ間では有意差が認められなかった。唯一、エゴグラムの優位型分類においてのみ、CP優位型とAC優位型、FC優位型とAC優位型のそれぞれ間に有意差を認めた(図2, b, いずれも $P < 0.05$ )。また、AC優位型のCNRS得点は最も低かった。

次に、CNRSの各因子得点(後期)と性格特性のタイプの関係を調べた(図3)。

まず分散分析によって、どの心理テストによる性格特性分類と関連があるかを検討した。その結果、エゴグラムの4つのタイプとF1およびF3との間においてのみそれぞれ関連性を認めた( $P < 0.05$ )。

図3に示したように、F2では、どの心理テストにおいても各タイプの得点が類似していた。F3では、YG性格検査のC型、エゴグラムのAC優位型、MASのI型の因子得点が著しく低かった。しかしながら、YG性格検査のC型はわずかに1名、MASのI型は2名のみと該当者

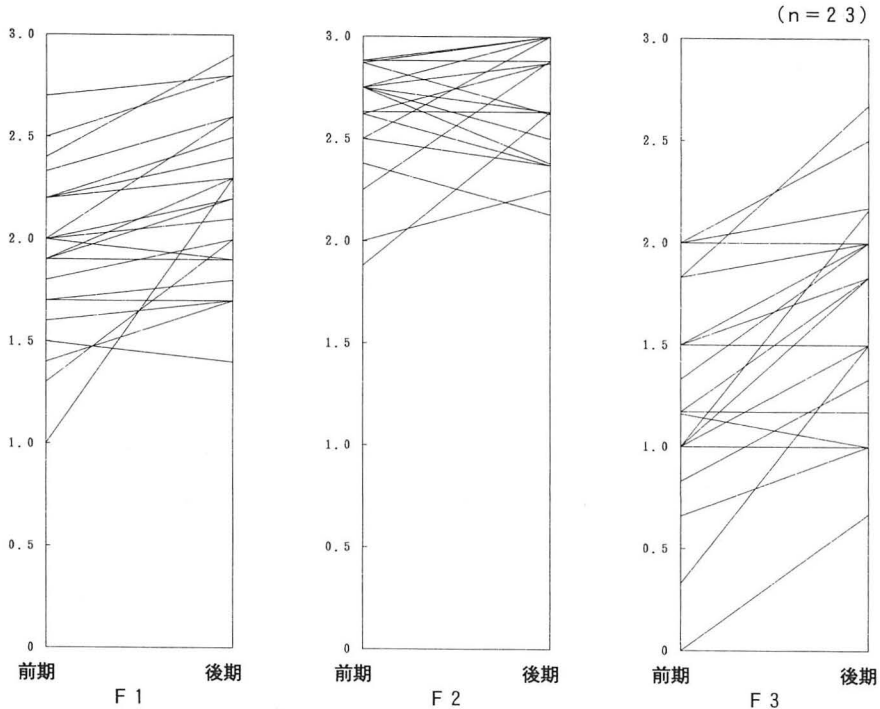


図1 対象—看護者関係評価尺度を用いた患者—看護学生間の自己評価の経時的推移  
縦軸：因子得点。横軸：評価時期(前期, 受け持ち2日目；後期, 受け持ち13日目または退院時)

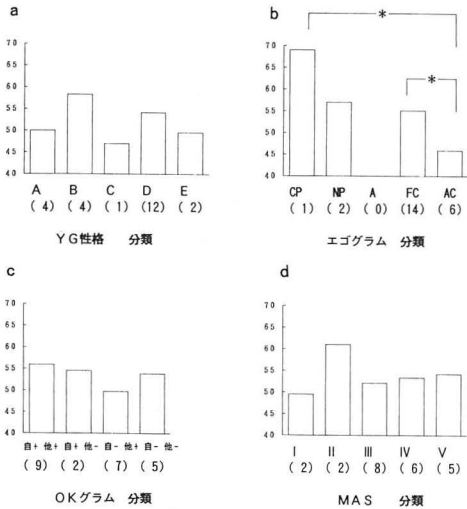


図2 種々の心理テストによって特性分類した対象のCNRS 総得点の比較  
縦軸：CNRS 総得点。( )：人数。\*：P<0.05

が少なかった。

また、CNRS の因子得点と MAS 総得点間には相関関係を認めなかった。

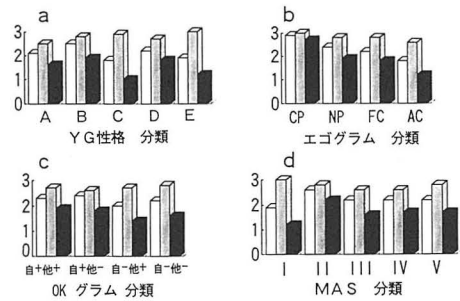


図3 種々の心理テストによって特性分類した対象の因子得点の比較  
縦軸：因子得点；□，第1因子；▒，第2因子；■，第3因子。

これだけの結果から結論することは難しいが、YG 性格検査のC型の性格特徴として、情緒的に安定しているが消極型であること、MASのI型は高度の不安をもつ者であることを考えると、専門性に関するF3の得点が、他のタイプと比べて低値であったことと矛盾しないと言えよう。

YG 性格検査は一般に、情緒、人間関係、行動、知的活動の特性を診断すると言われている<sup>2)</sup>。

表1 エゴグラム各優位型とそれ以外のタイプの CNRS 因子得点の比較

CNRS 因子得点 (平均±不偏標準偏差)					
前 期			後 期		
	F2		F1	F3	
FC (n=14)	2.73±0.20	}	CP (n=1)	2.67±0	}
その他 (n=9)	2.40±0.37		その他 (n=22)	1.63±0.48	
			AC (n=6)	1.82±0.33	1.20±0.41
			その他 (n=17)	2.30±0.35	1.84±1.43

\* : P<0.05    \*\* : P<0.01

表2 CNRS 各因子得点の前期・後期の比較において有意差を認めた心理テストのタイプ  
表中、上段は前期の、下段は後期の因子得点を示す。

心理テスト タイプ (人数)	F1 平均±不偏 標準偏差	F3 平均±不偏 標準偏差	心理テスト タイプ (人数)	F1 平均±不偏 標準偏差	F3 平均±不偏 標準偏差
YG性格 A (4)	1.83±0.17 2.05±0.26	—————	エゴグラム FC (14)	1.96±0.44 2.24±0.34	1.27±0.55 1.77±0.42
YG性格 D (12)	2.03±0.26 2.21±0.43	1.33±0.53 1.76±0.49	OKグラム 自+他+ (9)	—————	1.30±0.48 1.91±0.36
MAS III (6)	—————	1.10±0.69 1.60±0.58	OKグラム 自-他+ (7)	1.82±0.30 1.99±0.32	—————
MAS IV (5)	—————	1.39±0.36 1.72±0.37	OKグラム 自-他- (9)	—————	1.17±0.77 1.60±0.61

\* : P<0.05    \*\* : P<0.01

また、MASは個人が認知している身体的・精神的不安の程度をはかる尺度<sup>4)</sup>、OKグラムは他人との関係にとる基本的構えを知る尺度<sup>3)</sup>、さらにエゴグラムは、自我状態の構造からパーソナリティの特徴を明らかにする尺度<sup>3),5)</sup>とそれぞれ考えられている。本研究の結果から、このエゴグラムによる性格特性のタイプに対人関係評価が何らかの影響をうけることが明らかになった。

そこで、エゴグラム各優位型とそれ以外のタイプとの間でt検定を行い、対人関係とエゴグラムとの関連をさらに検討した(表1)。なお、この分析にはCNRSの前期および後期の評価得点を用いた。その結果、前期F2においてFC優位型とそれ以外のタイプ間に有意差を認めた(P<0.05)。また、後期F1でCP優位型がそれ以外のタイプより有意に高く(P<0.05)、逆にAC優位型がそれ以外のタイプより有意に低かった

(P<0.01)。このことから、人間性への信頼感にかかわる因子には、CP優位型の肯定的側面である良心的、責任感が強い、道徳を尊ぶなどの性格傾向が作用して、自己評価を高くしたと思われる。一方、AC優位型が有意に低いことには、妥協性に富む、従順、遠慮がちな側面が影響しているのかもしれない。さらに、後期のF3において、AC優位型の因子得点が有意に低いのは、患者との関係が深まっていくなかでも、同タイプのパーソナリティが慎重さや自主性に乏しいことから専門的事柄への自信がなかなかもてないことを示していると推察された。エゴグラムからみた看護職の適性に関しては、NP、Aの高いものが看護婦の適性が高く、ACの高いものは適性が低いこと<sup>6),7)</sup>や看護学生の高不安群はACが高く、生活状態にストレスを感じる人が多いこと<sup>8)</sup>などが報告されている。患者一

看護者間の親密性をみる CNRS を用いた対人関係評価においても、AC 優位型の人間関係作りの苦手が反映されていると言えよう。

最後に、心理テストによる性格特性の各タイプごとの前期・後期の因子得点を比較した(表2)。これによると、一部のタイプでF1またはF3の因子得点が有意に増加していた。その中でエゴグラムに注目すると、FC 優位型では、F1, F3の両者の因子得点が有意に増加していた(いずれも $P < 0.01$ )。FCの肯定的側面の特徴である、創造力や好奇心が強いことなどが影響して因子得点が増加したとも考えられる。

人間関係を発達させる要因として、川野は技術としての専門的なコミュニケーション、能力としての共感・受容・ケアリング等および自己理解を深める必要を述べている<sup>9)</sup>。CNRSは対象—看護者関係の形成を測定するものであるが、エゴグラムとの関連が若干であるが明らかになったことは、人間関係を深めるために役立つヒントであると考えられる。

著者らは、CNRSによる対人関係評価において、患者の学生評価や他学生の患者対受け持ち学生評価よりも、受け持ち学生の自己評価得点が低値であること、また、良好な関係にあると、患者と学生の接触時間が長いことを明らかにした<sup>10)11)</sup>。

今後、臨床実習における学生指導において、CNRSや学生の性格特性、さらに、学生の看護行動などを総合的に考慮しながら、看護の最も基本的かつ重要な要素である対人関係形成過程を支援したい。

## 文 献

- 1) 深井喜代子・杉田明子：対象—看護者関係評価尺度の開発—第一報—, 日本看護科学会誌, 14(3), 200—201, (1994)
- 2) 八木俊夫：新版 YG テストの実務手引き, 日本心理技術研究所, (1992)
- 3) TAOK 教育システム研究会：TAOK 診断 TEXT, 適性科学研究センター, (1993)
- 4) 阿部満州他：日本語版 MMPI 顕在性不安検査使用手引, 山京房, (1985)
- 5) 末松弘行：エゴグラム・パターン, 金子書房, (1990)
- 6) 松田久美子：看護者の Burnout とエゴグラムに示される個人特性との関連, 看護研究, 21(2), 61—68, (1988)
- 7) 太湯好子, 杉田明子, 酒井恒美：ナースの Burnout 症候群と交流分析の理論による自我構造との関係, 平成4年度科学研究費補助金研究成果報告書, 17—35, (1993)
- 8) 稲葉佳江, 丸山知子：看護学生の在学時と卒業後のエゴグラムによる自己認知の変化及び不安性格特性に関する検討, 交流分析, 18(1), 53—60, (1993)
- 9) 川野雅資：人間関係技術をどう磨くか, 月間ナースデータ, 13(1), 72—78, (1992)
- 10) 田中美穂, 新見明子, 深井喜代子：臨床実習における看護行動と対人関係からみた患者—看護学生関係の変化, 日本看護研究学会雑誌, 18, 115, (1995)
- 11) 深井喜代子, 新見明子, 田中美穂：臨床実習中の患者—看護学生関係の対象—看護者関係評価尺度 (CNRS) による分析, 川崎医療福祉学会誌, 5(2), (1995) 印刷中

